



## NO.099 屋久島、隠れた文化的景観?



屋久島、麓まで下りが続くトロッコ列車軌道

### Personal Data

賛助会員・世界遺産検定マイスター

**槇 一彦**

(神奈川県)

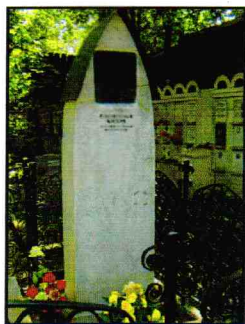
屋久島では、ご存知のように、特異な気候や高降水量から豊富な植生が育まれています。特にスギの樹勢は広く見られ、樹齢1,000年を超える屋久杉は、神木として伐採されずに、屹立しています。江戸時代に薩摩藩・島津氏が約7割ものスギ原生林を伐採したため、1923年に「屋久島憲法」により国有林化が始まり、守られてきました。しかし、植林されたスギは軽く、加工のし易さから、保護の対象とはなりません。そして、この運び出しに使われたのが、トロッコ列車です。

縄文杉への登山路の最初8.5kmは、このトロッコ軌道を進みます。途中の小杉谷には、当時の伐採基地として、住居や学校が備わった、文化圏が形成

され、最盛期には500人ほどが生活していました。スギの搬出と併せて、大正期に敷かれたトロッコ列車は、居住者の生活物資の運搬に不可欠でした。その一番の特徴は、山を下る際に無動力、自重で進むこと。当時の技術としては画期的でした。麓まであえて上り坂の無い軌道が敷かれ、列車は地球の重力に則って下っていきます。

複合遺産的要素も見られる自然の中、社会の要望で保護されながら残存する文化的景観(?)を堪能しながら、トロッコ軌道を歩き、縄文杉を訪ねてみてはいかがでしょうか?

## NO.100 モスクワの教会



アントン・チェーホフの墓  
右手の壁面は若い兵士の墓

### Personal Data

賛助会員

**稲垣 滋子**

(東京都)

1993年秋から7カ月間モスクワに滞在しました。仕事の合間に訪れたロシア正教の教会や修道院を懐かしく思い起こしています。

モスクワ川に沿った広大な公園、コロームスコエにはギリシャ十字形プランの「主の昇天教会」があり、白く美しいすっきりした姿に魅せられました。堂内のイコノスタス、詠唱の声、信徒の捧げる蠟燭など、ソ連が崩壊して教会が復活したことを実感しました。ここは私が帰国した1994年に世界遺産に登録され、数年後に再訪しました。

『ノヴォデーヴィチ修道院関連遺産群』(2004年登録)を訪ねたのは、1994年のことです。この墓地は、政治家、音楽家、文学者などの墓石がユニークな形をしています。ゆったり座った全身像(シャリアピン)、楽譜が刻まれた墓石(ショスタコーヴィチ)、白壁にとんがり屋根(チェーホフ)な

ど。その近くの壁面には、ナチス・ドイツ軍との戦いで亡くなった若い兵士のお墓が写真付きで並び、1941年から1942年の同じ日付であることに胸を衝かれました。

「黄金の環」と呼ばれるモスクワの北東近郊12の古都のうち、現在4カ所(3件)の歴史地区や建造物群が世界遺産となっています。『セルギエフ・ポサドのトロイツェ・セルギエフ大修道院』(1993年登録)はロシア正教会の中心地のひとつです。私が訪れたのは1993年秋で、登録が決まった直後のはずなのに、敷地内を歩く聖職者や神学生の姿からは、そのような気配は感じられませんでした。防壁の外に出ると、この地が発祥というマトリョーシカの店が並んでいました。

世界遺産を勉強している今、あらためてこれらの教会を訪ねてみたいと願っています。

## NO.101 過去から現代に繋がる富士山への信仰



巡拝所御来迎場(女人天上と書かれた石碑)  
かつては巡拝のための鳥居があり、晴天なら、この先に富士山が見える

### Personal Data

賛助会員・世界遺産検定マイスター

**今仲 初実**

(兵庫県)

富士山の構成資産を巡る旅を通して、噴火を繰り返す畏敬の存在から信仰の対象へ、そして庶民が登拝する山への変遷を肌で感じました。河口浅間神社の社前、「河口御師の家」には、かつて甲信越方面からの富士講信者が集いました。ここには、江戸時代の登拝(とはい)の様子が描かれた「富士山明細図」が所蔵されています。船津胎内樹型に参詣する人々、馬から降りてまさに登拝しようとする様子、七合目付近の身祿殿で祈りを捧げる人々。富士山信仰を知る上で貴重な資料です。登拝の広まりは、富士講の開祖・長谷川角行(はせがわ・かくぎょう)に始まります。人穴富士講遺跡で修行を行い、人々を苦しみか

ら救った角行。北口本宮富士浅間神社の参道には、角行が爪立修行したという立行石(たちぎょういし)が鎮座しています。

江戸時代、登拝が庶民に広まる中、女人は禁制でした。どうしても富士を拝みたいという、女性の気持ちは強かったようです。吉田口登山道2合目から林道を進むと、富士山巡拝所女人天上の標識が現れます。苦勞の末、ここに立ち、ご来光を仰いだ女性達の気持ちは如何ばかりだったでしょう。現代は老若男女多くの人々が富士山頂に登り、感動をおぼえます。日本人の富士山信仰は、富士が荒ぶる山だった頃から現代まで、脈々と繋がっているのです。